

プロジェクト名：日本陸軍における戦争神経症に関する実証的研究

プロジェクト代表者：細渕富夫（教育学部・教授）

1 目的

戦争と精神障害との関係を明らかにするという課題は、近年注目されている災害精神医学の研究課題とも関連する重要な研究課題である。戦後の日本でこの分野の研究は、敗戦による混乱と無力感、そして軍国主義の否定感情を背景に、十分な検討がなされないまま今日に至っている。

アジア・太平洋戦争期において、国府台陸軍病院は、精神神経疾患に罹患した兵士のための特殊病院として整備され、精神神経疾患患者（以下、精神障害兵士とする）は原則として国府台陸軍病院へ転送・収容された。ここに収容された精神障害兵士の総数は10,453人である。その内訳をみると、もっとも患者数の多い疾患は精神分裂病（歴史的用語として当時の表記のまま記載する）で4,384人（42%）、ついでヒステリーが1,199人（12%）、頭部戦傷・外傷性てんかんが1,086人（10%）となっている。

戦争と深く関連する精神疾患は言うまでもなく戦争神経症である。戦時中、国府台陸軍病院では戦争神経症（陸軍では「戦時神経症」と呼称していた）の治療と対策に勢力的に取り組んでおり、戦争神経症の実態を解明する上で、その診療記録はきわめて貴重な資料となる。幸いなことに戦時中の国府台陸軍病院における診療記録である『病床日誌』は焼却命令に抗して関係者が地中に秘匿したことにより、焼却・散逸を免れ、現在国立下総療養所に移管され、8,002冊が現存している。

我々は、浅井（1993）により作成された病床日誌複写版を資料として、戦争・軍隊と精神障害との史的関係について探求してきたが、本研究では、病床日誌全冊のデータベース化をすすめつつ、日本陸軍兵士に見られた戦争神経症の類型化を試み、症例の生活史的背景について検討することを目的とした。

2 方法

『病床日誌』8,002冊は浅井により分類整理されているが、戦争神経症として分類されてはいない。そこで、ヒステリー、反応性精神病、神経衰弱の3疾患を戦争神経症近縁疾患とみなして、「精神神経症」として分析することとした。そうすると、戦争神経症兵士の『病床日誌』は1,372冊となる。そこでまず、『病床日誌』全簿冊について記載事項全46項目のデータベースを作成することとした。次に、ヒステリー（臆病）として分類された805冊について、症例の発病原因から診療経過、転帰までをていねいに読み取り、類型化しつつ典型的症例について分析・考察することとした。

3 戦争神経症の類型化とその実態

戦争神経症の類型については、その発症時の状況、初期症状、固定機転に着目した類型が報告されているが、我々は患者本人ではなく、診療記録を分析するという研究上の制約から病床日誌の第壱号紙裏面に記載されている「血族的関係既往症原因経過現症及び治療」欄に記述された発症状況・経緯などから次のような類型化を試みた。

- (1) 戦闘行動での不安・恐怖によるもの（戦闘恐怖）
- (2) 戦闘に伴う疲労によるもの（戦闘消耗）
- (3) 軍隊生活への不適應によるもの（軍隊不適應）

- (4) 軍隊生活における私的制裁によるもの(私的制裁)
- (5) 軍事行動における自責感によるもの(自責感)
- (6) 加害行為に対する自責感によるもの(加害による罪責感)

まだ分析途上にあるため、各類型の人数を示すことはできないが、これらの類型のうち、比較的多くみられるのは、「戦闘消耗」や「軍隊不適応」、「私的制裁」であり、「自責感」や「罪責感」はやや少ない印象である。

4 戦争神経症兵士の症例分析(一部紹介)

《症例1》歩哨勤務中に経文を唱え始めるなどの異常行動を示した兵士(25歳)

- ① 心因性精神病、② 補充兵役、③ 歩兵・二等兵、④ 内地還送

身元調査によれば、本症例は素行良好にして近隣の信望も厚く、性格も温順であったという。家庭は製造販売業を営み、生活程度は中流であった。東京の某弁護士宅に事務員として働きながら××大学工科夜間部に進学し、卒業した。途中、過度の勉強により神経衰弱となり、対人恐怖症を呈したが、慈恵会医科大学教授・森田正馬の紹介により京都の三聖病院に入院した。約2ヶ月の治療で完治・退院した。1938(昭和13)年9月15日応召入隊。

本症例の原因経過欄には、次のように記載されている。「支那或寧県馬橋鎮第三分哨ニ於テ歩哨勤務立哨午前四時五分頃次ノ立番交替ニ行キシニ定位置ニ居ラズ分哨裏ニテ経文ヲ唱ヘイタリ/名ヲ呼ブニ返答ナク依然経文ヲ唱フ/連行セントスルニ左手ヲ突然突出ス等行動不審ナルニ依リ受診ス」。また、「現症」として、「顔貌一点ヲ凝視シ全ク無表情/顔色尋常態度無頓着ナレド従順稍常同的姿勢ヲ保持ス/応答全クナク口中含聲ニテ経文ヲ唱ヘ折々左手ヲ左側ニ突出スト同時ニ『ヤッ』ト云フ/鋭キ気合ヲ發ス/終レバ再ビ経文ヲ唱フ」と記されている。

以上の経過・症状により内地還送となり、小倉陸軍病院を経て、1939(昭和14)年10月28日国府台陸軍病院に転院した。小倉陸軍病院での診療記録によると、歩哨勤務中に夜襲があり、敏感になっていた関係で急に夢中になった。それ以来のことについてはあまり記憶がないと言う。彼は「夜ニナルト敵ノ夜襲ガアリ、太鼓ノ音ガキコエテ恐ロシイ気持ガシテイタ」と述べている。国府台陸軍病院ではかなり症状も軽快し、次のような自覚症状が語られている。「何だか頭がぼうっとしてだるい。夜はだいたい眠れるようになったが、ときどきとりとめもないことを考えこむとなかなか眠れない。昨日は浦島太郎の昔話を考えた。なぜ玉手箱を開いたらおじいさんになったか。それは報いを求める心が起こって自分の天職を忘れたからだ」と結論してみた。なかなか仏教的な深い意味のある話だと思う。馬橋鎮というところで夜襲にあってからどうしたのかさっぱりわからない。船に乗るとき、揚子江を見て初めて見たことのある所だと気がついた」。その後症状が安定し、1940(昭和15)年6月31日除役退院(永久兵免)となった。

5 まとめ

本研究は日本帝国陸軍と精神障害との関係を解明する作業の一部である。もはや戦後ではなく、戦前かもしれない。二度とこうした兵士を生まないためにも戦争神経症の研究は重要である。戦争神経症兵士は「臆病者」と蔑まれ、「詐病」扱いされた者も少なくない。戦局の悪化とともに精神障害兵士問題はいつそう拡大深化していくが、陸軍の対応はきわめて不十分であった。症例のていねいな分析・考察による、その全容解明が課題である。